



自校史の実践記録(その1) : 講義「神戸大学史」の 「なぜ大学史を学ぶのか」の記録

湯田, 拓史

(Citation)

研究論叢, 17:47-53

(Issue Date)

2010-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008666>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008666>



自校史の実践記録（その1）

講義「神戸大学史」の「なぜ大学史を学ぶのか」の記録

湯田 拓史（神戸大学発達科学部研究員）

はじめに

本稿は、講義「神戸大学史」で実践した講義記録である。本講義の内容は、神戸大学の自校史教育である。講義は例年、共通教育の教養原論（総合教養）として1回生と2回生を中心に200人程度が受講する。前期と後期にそれぞれ1コマ実施される。対象学部は全学部であるが、教室の収容人数の問題上、開講年度と前期後期によって受講可能な学部が異なるよう調整されており、全学生が受講する講義にはなっていない。シラバスに掲載されている講義の趣旨は、『神戸大学ビジョン2015』が謳う本学の学術的・社会的役割や特質などを、歴史的観点を軸に総合的に考察することにした。近代日本の発展とともに歩んできた神戸大学百年の歴史を、多角的なテーマから捉え直すことを通して、『知の府』たる本学の歩みと日本社会のかかわりを広く理解する視点および方法を提示し、学生自ら本学の『知』を担う一人として本学で学業を営むことの意味と将来の方向性を見いだす契機とする」である。神戸大学の発展を社会と不可分なものとしている点が講義の特徴である。

講義は、第1回目を学長による講義から始め、『神戸大学百年史』を執筆した複数の教員によるオムニバス講義となっている。開講当初は各学部から教員が出向いて講義していたが、2007年度からは、神戸大学百年史編集室関係者と医学部・海事科学部の教員によって講義がなされ、2010年3月末に神戸大学百年史編集室が閉じられ、2010年4月1日に神戸大学大学文書資料室に改組された現在に至っ

ている。

2010年度の開講日程は次のとおりである。

第1回 [学長講義]神戸大学の成り立ち

福田秀樹学長担当

第2回 なぜ大学を学ぶか

湯田拓史担当（発達科学部研究員）

第3回 [概説]日本の高等教育制度と神戸大学

野邑理栄子担当（大学文書資料室講師）

第4回 神戸大学の歴代学長—時代と思想—

河島真担当（人文学研究科准教授）

第5回 神戸大学のキャンパス統合

野邑理栄子担当

第6回 兵庫、神戸の医学・医療と神戸大学

岡田安弘担当（名誉教授（医））

第7回 六甲台キャンパス歴史探訪

野邑理栄子担当

第8回 海に開かれた神戸大学—海事科学部に

おける教育の歴史と変遷—

石田憲治担当（海事科学研究科教授）

第9回 神戸大学の歴史と地域社会

湯田拓史担当

第10回 神戸大学精神の源流を探る—校風「真

摯・自由・協同」の成り立ちを中心に—

天野雅敏担当（経済学研究科教授）

第11回 神戸大学史における学理と実践

天野雅敏担当

第12回 「学び」奪われた時代—戦争と学校—

野邑理栄子担当

第13回 神戸大学の歴史的展望

船寄俊雄担当（人間発達環境学研究科教授）

第14回 世界の中の神戸大学—国際化への道

程— 野邑理栄子担当

第15回 国立大学法人化の前と後

湯田拓史担当

本記録である、「なぜ神戸大学史を学ぶのか」は、一連の講義の第2回目の講義にあたり、講義「神戸大学史」を学ぶ意義を説明することを目的としている。

これまでの自校史教育では、私立学校を中心として、学校の「建学理念」や著名な教員や卒業者の列伝などを教えるイメージがあるが、近年は国立大学の法人化が実施されたことで、国立大学も自校の社会的位置づけを明確化して学生たちに伝える必要に迫られている。そして、内容も体系だったものに整備され、FD (Faculty Development) にも関連しうる講義として位置づけられつつある⁽¹⁾。いわば自校史を通して、学生たちに高等教育機関で学ぶことの社会的意義を教えることが重要になっているのである。

以上の動向を鑑みて、講義では「学問としての『大学史』を学ぶ意義」、「大学生としての『大学史』を学ぶ意義」、「神戸大学史を学ぶ意義」の3つに分節化している。なぜなら、学生に対して、この半世紀における日本の大学の社会的位置づけが大きく変わったことを説明することが必要だからである。そして、その変化が学生にとって大学に就学することの意義を大きく変えたことに繋がることを説明するためでもある。それは、神戸大学のみで完結する文脈で自校史を学ぶのではなく、あくまで広く社会との関連で学生自らの立ち位置を認識させることである。言い換えれば、「社会の中の大学」を学ぶことで「社会の中の大学で学ぶ学生」であることの意義を知ることができる。そうすることで、「神戸大学史を学ぶ意義」は、社会的文脈から学生に理解されると考えるのである。

以下、本稿は2010年度前期に実施した講義の概要を述べたうえで、学生のレポート課題を掲載する構成とする。そして「おわりに」

で、現時点における講義の到達点を確認する。

I 講義の概要

1 学問としての「大学史」を学ぶ意義

「大学史」(本来は、「高等教育史」になるが、現在の日本では、高等教育＝大学なので、以下「大学史」とする一著者注)を学ぶことは、端的に言えば「高等教育の大衆化」の歴史を学ぶことであると講義では最初に述べている。

この「高等教育の大衆化」では、第一に「大学の量的かつ空間的拡大」と、第二に「高度経済成長による家庭での教育への追加費用が確保できた」ことで達成したことを指摘し、具体的に検証している。

第一の「大学の量的かつ空間的拡大」についてプレゼンテーションソフトを使用して次のように説明している。大学の学校数は、1955(昭和30)年には、国立大学72校・公立大学34校・私立大学122校の計228校となっている。これが2005(平成17)年には、国立大学87校、公立大学86校、私立大学553校の計726校となっている。増加率をみると、国立大学約1.21倍、公立大学約2.53倍、私立大学約5.95倍、全体で約3.18倍である。私立大学の増加率が突出していることが指摘できる。

大学の学生数は、1955(昭和30)年、国立大学が186,055人、公立大学が24,936人、私立大学312,364人、計523,355人となっている。2005(平成17)年の学生数は、国立大学が627,850人、公立大学が124,910人、私立大学が2,112,291人、計2,865,051人になっている。増加率は、国立大学が約3.37倍、公立大学が約5倍、私立大学が約6.76倍、全体で約5.47倍である。4年制大学への進学率をみると、1955(昭和30)年7.9%から2009(平成21)年に50%を越えて、約5倍強の状況となっていることを説明している。

空間的拡大についても、都市部を中心として私立大学は設置されたが、国立大学は各都道府県に最低でも1校設置されたことを指摘している。さらに、公立大学が各都道府県に設置されたことと、地元若者（特に女性）をとどめ置くため、私立短期大学が地方を中心に設置されたことを先行研究から説明している⁽²⁾。

量的にも空間的にも拡大したのが、この半世紀の我が国の動向であることを強調しているのである。

第二の「高度経済成長による家庭での教育への追加費用の確保できた」については、次のように説明している。

高等教育を受けるのに必要な教育費用は、授業料だけではない。高卒で働いて得られたであろう所得を放棄している分も含まれている。これを経済学用語で「放棄所得」という。しかし、これは同時に大卒のシグナルを得るために必要な費用、すなわち「機会費用」でもある。講義では、「放棄所得（＝機会費用）」として表記している。

本来「放棄所得（＝機会費用）」は、義務教育である中学校卒業から計算するべきだが、1974(昭和49)年以降、高等学校進学率が90%を超えている現状では、中等教育段階終了にあたる高等学校卒業後から計算するのが一般的である。

ここで講義では、15分程度の時間をとって実際に学生たちに義務教育修了後から神戸大学を最短で卒業するまでに要する家計教育費の算出をさせている。その際、義務教育段階であっても私立学校に就学していたものについては、追加費用を加算させている。家計教育費に「放棄所得（＝機会費用）」として300万円×4年間＝1200万円を加えさせることで、神戸大学卒業までに2000万円前後の費用がかかることを学生に認識させているのである。

もっとも、この「放棄所得（＝機会費用）」をもとにした大学進学費用対効果を求める計算は、生涯獲得賃金を前提としての判断であることを説明している。大卒者と高卒者の生涯獲得格差をもとに収益率を出すと、だいたい年利6%の差となっている⁽³⁾。意識しない場合でも世代を越えた経験から常識のように判断されていることを講義で確認しているのである。

さて、講義では算出した家計教育費を基にして、「教育の大衆化」が「教育の私事化」をもたらせたことを実感させている。それは、進学など教育にまつわる動機付けが社会的要請によるものというよりは、家庭のドラマで決定づけられるようになったと言い換えられる。多くの家庭で、子弟の就学期間延長を達成しており、とくに我が国ではわずか半世紀で、子弟が10代半ばで就職していた時代から20代前半まで就学する社会になっている。当然のことながら、就学期間の延長によって就学にかかる費用は膨大なものになっている。前述のように、講義では学生に対して「放棄所得（＝機会費用）」を加えた費用の総額の確認をさせるのであるが、詳細がわからない学生には、家計教育費を支払ってきた保護者とよく相談するように促している。一方で、詳細を確認した学生には改めて保護者に感謝するように論ずことにしている。

だが、講義で学生に知ってほしい事実は、国立大学法人に多額の公費が投入されているということである。家計教育費もかさむが、それ以上に公費が投入されている事実を知らせることで、私的な話から公的な話へ転換させているのである。

その際、知らせるべき情報は、単純計算で1人の学生に年間約150万円程度の公費が投入されていることである⁽⁴⁾。ただし、この数値は、学部ごとの経費の違いを考慮していないことを注意している。実際は、医学部や

工学部や海事科学部ではもっと経費がかかっているし、逆に文学部などの人文科学系の学部ではそれほどの経費はかかっていないのが現状である。日本の場合、国公立大学だけではなく、私学助成金として私立学校にも公費が投入されている点も説明している。

講義では、社会から期待を込められているからこそ、公費が投入されていることを強調している。大卒者が社会で活動し、国や地方行政団体へ納税をして、富が社会に還元されるからこそ、大学への公費投入が社会から支持されていることを説明しているのである。

このように、「大学史」を学ぶことで、大学にまつわる中長期的変動を知るだけでなく、公費投入の意義を再確認することができる。つまり、私事化しつつある大学での生活を公的なものに昇華させることの重要性を認識できるのである。

2 大学生として「大学史」を学ぶ意義

講義では、個人を評価する際に、しばしば用いられる指標として、「能力」・「人間性」・「シグナル」・「甲斐性」の4つがあることを説明している。

それぞれの項目は概念として等価ではないので、本来は並列できる項目ではないことも説明している。そもそも、「能力」と「シグナル」は関連しているし、「甲斐性」は「能力」の下位概念になる。だが、「甲斐性」は、資本制社会において指標として重要視され、社会が個人を評価する際に、しばしば「能力」から分節化されて用いられている。

講義では、これらの項目設定の補足説明として、神戸大学の教員が執筆した次の文献を紹介している。人的資本論、およびシグナリング理論については、小塩隆士『教育の経済分析』（日本評論社）を参照するように指導している。現代社会での両理論の流通動向については、三上和夫『教育の経済』（春風社）を

参照するように指導している。さらに資本制社会での信仰者の生活態度を分析した古典的研究としてマックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店）があることを説明している。その際、ウェーバーは、資本制社会で活発な経済活動を行う信仰者集団を対象として、彼らが、経済活動を悪行と見なしてきたそれまでの宗教原理を読み替えることで、積極的に経済社会に関与していった過程を検証したことを指摘している。また、資本制社会の論理に対する言説として、「道德」が社会に流通する事態を検討した三上剛史『道德回帰とモダニティ』（恒星社厚生閣）があることを述べている。

講義では、以上の文献を参考に、二項対立の軸としての「能力とシグナル」、「人間性と甲斐性」を2本設定することで、評価指標を4つに分類して図式化を試みている。

指標としての「能力」には、学力や体力、要領の良さがあることを説明している。「能力」の一つとして学力を含めると「シグナル」がつながっているようにみえるが、本講義では学歴の象徴的価値を強調したものとして「シグナル」を設定することで、「能力」と切り離している。すなわち、学歴がそれ自体、個人の能力や努力と切り離された社会的ステータスとみなされることを説明している。もっとも、「シグナル」は読み取り自体が困難であることを講義では指摘している。現時点では、神大生同士なので「シグナル」としての学歴（学校歴）は相殺しあっているが、就職活動の際に、面接時などで確実にあらわれるはずであることを指摘したうえで、バイト先で履歴書を提出した際に実感した人もいるのではないかとの問いかけをしている。

就職活動時に「学歴や学校歴は関係ない」という言説に遭遇した場合には、その言説を述べている人の属性を確認する必要があることを講義では指摘している。もし、言説を述

べている人が中卒の成功者ならば妥当な言説であるが、高卒者以上の学歴者だった場合は妥当性が低い。ましてや東大や京大出身者だった場合は、単なる嫌みである。なぜなら産業社会では、義務教育終了後の学歴に沿って就職機会が決定されているからである。産業社会と大学との接続部分で「シグナル」は、確実に発揮されていることを説明している。

「能力」と「シグナル」は連動していることが前提とされがちだが、学歴を重視する社会を3世代以上経験した社会では、伝統校の「シグナル」が独り歩きしている場合もあることを指摘している。「学歴と能力は関係ない」という言説は、「シグナル」が独り歩きした状況を指したものともいえる。

講義では、人によっては、就職期間中に「シグナル」に自意識が押しつぶされる危険性があることを注意している。逆に「シグナル」が先行して意図せぬ局面を招く可能性があることも注意している。そして、こうした「シグナルの暴走」を回避するために「大学史」を学ぶ必要があると指摘している。なぜなら、「大学史」を学ぶことの意義は、「シグナル」を飼い慣らすことだからである。神戸大学の「シグナル」が形成された過程は、「大学史」のうち「自校史」で知ることができる。「神戸大学史」を学ぶことで、「シグナル」としての「神戸大学」が形成された過程と社会への流通経路がわかり、社会での「神戸大学卒業」という「シグナル」の効果(5)を見定めて「シグナル」が発揮される程度を適切に調整することができる」と説明している。「シグナル」を調整することができれば、他の三つの指標と調和させることが可能となるであろうし、社会に出てから「シグナル」発揮による恩恵を受けることが出来るであろう、と講義で述べているのである。

3 「神戸大学史」を学ぶ意義

「神戸大学史」を学ぶ意義としては、神戸大学が蓄積してきた情報を共有することが挙げられる。具体的には、各部局が取り組んできた研究や教育活動、学生サークルが蓄積してきた技能や作法など多岐にわたっている。情報を共有することで、「神戸大学マインド」（俗に「神大生らしさ」と呼ばれるもの）を継承することができる。これらは「神戸大学史」講義を通じて、学ぶことができる。

一連の「神戸大学史」講義終了後、受講生が神戸大学の「シグナル」を飼い慣らせていることに期待すると述べて、講義を締めくくっている。

II 講義の課題レポート

講義の評価は、毎時間の感想文の提出をもって確認する出席点と課題レポート、神戸大学史常設展示の感想レポート提出の3点で決める。このうち課題レポートは、各講義を担当した教員から1講義1つの課題テーマを示し、学生が興味関心のあるテーマを2つ選んで提出する仕組みである。

本講義の課題レポートの題目は、次のとおりである。

講義で示した「社会が個人を評価する際に用いる4つの指標」のうち、これから自分が伸ばしたい指標を1つ選び、その理由を述べよ。

ここで、提出された学生レポートのうち2点を掲載する。

経済学部 A.K

これから私が伸ばしたい指標は「シグナル」である。今まで社会が個人を評価する際に最も重要視されるのは「人間性」だと思っていた。小学校・中学校の道徳の授業では人間性にまつわる多くのエピソードやその大切さを何度も教えられ、親からは人間性を高めるために努力するように言われて育てられてきたからだ。しかし、この講

義を聴いて「人間性」にはない「シグナル」の長所を知った。今まであまり重要視していなかった「シグナル」について深く考えるようになった。

「シグナル」は、確実にではないが「能力」とつながっており、読み取り自体が困難なものである。ここまでの話だと曖昧な指標のように思える。しかし、今までの自分の経験をじっくりと振り返ってみると、私はアルバイト先ではっきりと「シグナル」の重要性を実感したことがあった。私は個別指導の塾で働いているのだが、昨年の4月に面接をした時、一番はじめに質問されたのは、「この大学にかよっているか」ということであった。私はその時初めて、社会が「シグナル」を重要視していることに気付いた。きっと、この経験と同じように、来年の就職活動の時には「シグナル」は発揮されることだろう。

また、この講義で最も心に残ったのは「大学史を学ぶことは『シグナル』を飼い慣らすことである」ということだ。その時私は、「シグナル」が調整可能なこと、また「シグナル」を調整することで「能力」「人間性」「甲斐性」という3つの指標と調和させることさえも可能であることを初めて知った。神戸大学史を学ぶことは、公費投入の意義を知るためだとばかり思っていたが、将来の自分の人生にもかかわってくることを知り、以前にも増してこの科目の重要性を感じた。

以上で述べたように、「シグナル」は社会の中で非常に重要な役割を果たしており、大学史を学ぶことによって調整可能な性質をもつために「能力」「人間性」「甲斐性」といった指標よりもより伸ばし易く、また調整によって全ての指標と調和することができるので、この指標を選択した。

以上は、講義で説明した「シグナル」を選択した学生のレポートである。以下は「能力」を選んだ学生のレポートである。

経済学部 A. S

「社会が個人を評価する際に用いる4つの指標」である、人間性・能力・シグナル・甲斐性のうち私がこれから伸ばしていきたい指標は「能力」

である。

指標としての「能力」とは、学力や体力、要領の良さのことである。これは単に偏差値で測定されるものという意味ではなく、社会を構築する者として社会の役に立てる能力という意味であると私は解釈する。

私が特に重要だと思う具体的な能力は、他人とのコミュニケーション能力や危機察知能力、危機回避能力、または常識である。いろいろな人間と関わるうえで、コミュニケーション能力は必要不可欠である。他人の意見をしっかりと聞くことができること、またそれと同時に自分の意見をわかりやすく相手に伝えられることはとても重要な能力である。またある事柄について話し合ったり、物事を決定したり、何かを実行したりする際、何の障害もなく達成できるということはまれである。そのような時、危機察知、危機回避できる能力が必要とされる。そしてたくさんの人と交流するうえで必要最低限度の共通の価値観、つまり常識を身につけておくということも大切なことである。

このように、社会の一員として生活する際、いろいろな場面で「能力」が必要となる。大学生活は、この「能力」という指標を伸ばすのにとっても有効な機会である。まず基本的な学力に加えて各分野で必要な専門知識を身につけられる。次に高校よりも、さらに大きなコミュニティの中で様々な人と意思疎通を図る機会が得られる。また部活やサークルを通じ、大きな組織を運営する一員としての経験が積める。よって私は一度しかない大学生活で「能力」を伸ばすために毎日を充実したものにしていきたいと考える。

以上、学生によって選択した指標は異なるが、それでも社会で流通している評価指標についての見解と、今後の自分との関わりについて大学生活と関連付けて述べられている。

おわりに

大学に就学することの社会的責務、神戸大学生としての使命を自覚するためにも、本講義では次の点に考慮している。それは、社会と大学との関係のもとにおける学生自身の位置づけの明確化である。とくに、「放棄所得（＝機会費用）」の算出で卒業までにかかる費用を学生に認識させてから、さらに多額の公費が大学を介して学生に投入されている事実とその重要性を学生に知らせることで、大学での学びを私事的なものから公共性を有したものへと昇華させる契機となるように努めている。学生からの反応は良好であり、自校史を通して高等教育機関で学ぶことの社会的意義を認識させることに多少なりとも貢献できていると考える。

ただし改善すべき箇所もある。講義内容でいえば、「3 『神戸大学史』を学ぶ意義」にあたる箇所の内容が薄い。これは、オムニバス講義である以上、各講義の担当者の講師が設定する目標との整合性を考慮した結果、抽象化した表現でとどめる必要があると判断した結果である。事実上の第一回目にあたる導入部分の講義特有の構成とはいえ、当該箇所の内容充実を図りたい。

今後の課題は、引き続き神戸大学の歴史の多面的な検証をおこないつつ、各講師が講義の情報を共有することで、より体系的な講義内容をつくりあげることである。

参考文献

- 天野郁夫『日本の高等教育システム』東京大学出版会、2003年。
市川昭午『教育の私事化と公教育の解体』教育開発研究所、2006年。
矢野眞和『教育社会の設計』東京大学出版会、2001年。
-
- ¹ 寺崎昌男『大学は歴史の思想で変わる』東信堂、2006年。
² 藤原良毅『現代日本高等教育機関地域配置政策史研究』明治図書、1994年。
³ 矢野眞和『教育社会の設計』東京大学出版会、2001年、46頁。
⁴ 実際は学校間、学部間によって投入額に大きな差がある。今回掲載した数値はあくまで目安であり、正確な数値の把握は今後の課題である。
⁵ 産業社会との接続段階において「神大卒」が効果のある領域と効きづらい領域がわかる。